

第2回在日早慶OB・OG親善ゴルフ大会

衣替えも過ぎ、秋の装いが目に付くようになった2016年10月22日土曜日、第二回目となる在日早慶OB・OG親善ゴルフ大会が満を持して開催されました。

当日JR四ツ谷駅に待機中のクラブバスに23名が参集し、定刻の朝6時半、新西山荘カントリークラブに向けて走る約3時間。

車中でふんだんに配られた朝食・飲物等で腹ごしらえをしながら今回実行委員の順番である慶応の玄東貫実行委員長の気の利いたお言葉に聞き入って、「敵の段取りなかなか小気味よく甲斐斐しいぞ」との印象を抱きつつ、二年前に出会った同胞の敵陣参加者と再会を喜び、しかし和気あいあい装った虚々実々な会話に勤めました。尤も、虚々実々な心理は第1回目で負けている早稲田側だけの淡い敵愾心であって、凡そ敗者には心の余裕がないというの表れか。

ともあれ、秋晴れとは言えずとも終始そこそこの天候で18ホールを6組に分かれて堪能し、日々の成果を競い合うことができました。慶応からご参加の女子プロ永野選手がツアーアンダー（ご本人としては11回目のホールインはお見事）というのは別にすると、クロスで70台ゼロ、80台も四人だけという相当な難コースにも係わらず、心底楽しむことができました。結果は個人戦で優勝（康泰銀選手）と準優勝（朱茂選手）を早稲田がかっさらったものの、団体戦でまたもや慶応に持っていかれました。こちら開期期待の推進委員長安昌煥選手がベスコロと一打差まで猛追したのも効果及ぼす苦杯を喫したのでした。“親善だからいんです、”というのはこちらの今回までのロジックですが、三回目には、“試合は試合”と約変する予定です、きっと。

賞品の豪華さは優勝者のみならず、なんと総額24万余円（市場定価）。主にトクキゴルフの安昌煥先輩、場をご提供くださったマルマンの康康九先輩からご協賛を頂きました。



帰りの貸切バスでは待望の酒盛りパーティー。車中、慶応OGは塾女などと呼ばれるのかという愚かな問いかけが塾女バーにハマっている一部不肖早稲田側から提起されたり、両校の校歌（塾歌）・応援歌などが話題になり慶応の歌はどうしてどれもこれもこれほどマイナーなのか的な話になり、それに比べて早稲田はその第二校歌ですら超有名であるという自画自賛が展開され、慶応が第二校歌とは何ぞやと「待ってました」と

応答を見せたのでスカサズ早稲田二名が立ち上がり人生劇場を歌い出すありさまであり、これはもう江戸の敵を長崎で的酒盛りでハイテンションになりました。このようにこの大人の遠足イベントは実はゴルフ競技付き飲み会であって、その逆ではありません。このロジックも当然次回からは逆になります。こっと。

実に楽しかったこともあってか三回目は二年前ではなくぜひ来年に実現しようと満場一致の様相を呈しました。12か月経てみたら何故か自然に早稲田が勝っていたなどということはいかに如何にもなさそうなので早稲田は着実な戦略をもって次回に臨む必要があります。30代40代の動員が必要とか、いや年齢層の問題ではない等々議論の余地がありますが、とにかく早期に早稲田に一勝を!

この場を借りて、今回実行委員を引き受けてこのイベントを成功に導いてくださった慶応の同胞同志に厚く御礼の意を表します。

(文責：徐 富男)

会費(5000円)・賛助金は金融機関のATMからも送金できます! 下記口座へお振込みをお願いします

銀行名	ゆうちょ銀行
支店名	019(ゼロイチキョウ)
預金種目	当座預金
口座番号	0037085
口座名義	ワセダイガクウリトオモンカイ

(送金名義は会が認識できる名義でお願いします)

(編集:朴魯普)



WASEDA ALUMNI
SINCE 1885

早稲田大学ウリ稲門会

〒105-0001
東京都港区虎ノ門5-1-5
メトロシティ神谷町5階
東京神谷町総合法律事務所内
woori-tohmon@tkm-law.com
発行人：金 君夫(編集：編集委員会)

第27号

INDEX

- 1.2016年納涼会・奨学生証授与式
- 2.新宿明月館で「拡大幹事会および忘年会、加えて奨学生証授与式」
- 3.北京留学報告 / 金主栄 (国際教養学部3年)
- 6.ウリ稲門会関西支部近況
- 7.妻敬隆君逝く
- 5.第2回在日早慶OB・OG親善ゴルフ大会!
- 9.連載コラムのような編集後記

2016年納涼会・奨学生証授与式開催!

「納涼会」と呼ぶにはいささか肌寒く、すっかり秋となった9月24日の土曜日、リーガロイヤルホテル東京において「2016年納涼会・奨学生証授与式」が開催されました。

当日は、母校から第14代総長奥島孝康氏を筆頭に、李成市理事と岡本宏一理事、加えておなじみの関口八州男課長の4氏、そして早稲田大学韓国校友会から李賢儀会長を来賓に招き参席いただきました。

幕開けは当会の金君夫会長からの開会挨拶。金会長は其中で、今回が2回目の奨学生証授与式であることに際し、「会としてこの制度運営に取り組んだことで、同窓会活動の普遍的根幹を取り戻すことができたと語りました(別掲)。

続いて式次第は、母校来賓を代表して奥島元総長からいただく祝辞となります。元総長が「現総長が出席してしかるべきところ」とにこやかに口にしたその最中に、鎌田薫現総長が飛び入りで会場に登場、そのまじり祝辞でいただくという劇的なハプニング。その後、李賢儀韓国校友会会長からも「韓国校友会とウリ稲門会はより紐帯を強くするべきだ」との祝辞を賜りました。そして、いつになく「公式」感が高まる中、式次第はさらに奨学生証授与式へ移行。今年度の奨学生となったのは1年生3名。出席した2名に奨学生証が授与されました。(一人は体調を崩しやむなく欠席。後のページ掲載の拡大幹事会および忘年会で授与いたしました。)

その後、母校理事であると同時に当会会員である李成市学兄に乾杯のご発声いただき、出席した会員が連れて来てくれた赤ちゃんも含めると70名ちかい若若男女が集った初秋の宴は佳境に入ります。それぞれの近況を聴き、旧交を温め、新しく交友を広げる、時間はいくらあっても足りません。最後を飾る校歌斉唱とエール交換を依頼していた母校応援団には、会場が許さざり出番を遅らせてもらいました。満を辞して登壇した彼らのパフォーマンスで、早稲田にルーツを持つ一団の気持ちは最高潮に、今年も忘れ得ぬ夜となりました。



鎌田薫総長

乾杯の音頭は李成市理事



2016年ウリ稲門会納涼会・奨学生証授与式



ウリ稲門会ウェブサイト ▶▶ <http://blog.goo.ne.jp/wasedauritoumonkai>

編集後記

連載コラムのような編集後記

この10月、太平洋を臨む海浜部と深い緑に包まれた山間部の北部6市町が会場となる広大な現代アートイベント、茨城県北芸術祭を3日がかりで回ってまいりました。写真は、常陸大宮市に展示された台湾のアーティスト、ワン・テオの作品(半透明の作品の中から見る外の世界は、日常とは異なるもうひとつの世界)を体験する筆者です。



私は、財力があるならコレクターになりたいと思うほどに現代アートを好みます。なぜか、意表を突かれるからです。放っておくと経験のみに頼り、狭く凝り固まってしまう思考、その殻が破れる刺激がたまたま痛快なのです。今回の茨城も最新の科学技術を駆使した作品が多く、その展示会場が廃校になった山の中の中学校だったりというギャップも絡んで、大いに快感を覚えました。

現代アートイベントの元祖は、2年に一度開かれるヴェネ

チアビエンナーレ。世界最大のアートの祭典です。2017年は開催年にあたります。案内してくる人がいるから、5月に満を持して渡航することになりました。昨年の奨学生で国際教養学部3年の宗倫さん、記事を寄せてくれた金主栄さん同様、今年の9月からヴェネチアに留学しています。今号への彼女からの寄稿は私が運びました。なぜなら、彼女の留学報告も含んだ旅行記を、私が書くという野望に勝手に燃えているからです。ご期待ください。

つい先日、故妻敬隆先輩のお宅に訪問した際、「形見」そんな気持ちがあったのでしょうか、奥様に頼んで本を2冊(「アートとハイデガー」D・R・ウィラ著と「在日一世の記憶」小熊英二・姜尚中編)いただいで帰りました。私たちの祖国で起きていること、現代日本社会の深層、増幅する世界の混乱、こんな時だからこそ、先輩ともし話しかけたかったです。

「経済は文化のしもべである」これは、日本最大のアートイベント、瀬戸内トリエンナーレの礎を作った実業家の福武總一郎(パネッセホールディングス最高顧問)の言葉。ニュースに登場する人たちを見る度にげんなりしてしまう今日の頃、私たちはもっと「世界」を美しくできるはずです。

金君夫会長挨拶(抜粋)

諸先輩、諸学兄の皆様には平素よりウリ稲門会活動に心温まるご支援、ご協力を賜り、この場を借りて深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

この奨学金制度にいたる取り組みは昨年から始まったわけではありません。在校生の意識を把握するためのアンケートなど、実のところ2013年から始まっていました。

その最初のアンケートに答えてくれた後輩が今日も数人参加してくれています。その中の呉国峰くんが、今年の司法試験に合格したという嬉しい近況を聞きました。その他にも今日は出席できなかった2名の後輩が司法試験に合格したそうです。

また、昨年の奨学生だった女性2名の後輩は、社会人1年生として、二人とも博報堂で頑張っています。広告代理店で駆け出しとして働く彼女たちは今日もどこかのイベントで走り回っていて、参加できないことを残念がっていました。

その他にも就職が決まった、この9月から留学に赴いたと、思わず顔がまろぶニュースが聞かれます。

若い後輩たちの消息をここまで知りえていた、それは何年前のことだったでしょう、どれだけの月日を連れまいいでしょうか。先輩後輩がそれぞれを案じ、それぞれの楽し方を聞き、一喜一憂する。これこそが同窓会の根幹をなすものです。ここ数年の取り組みによ

って、その当たり前のことを当会は取り戻しています。後輩それぞれの活躍と同時に、私はそのことをとても嬉しく思います。



金君夫会長

今日この制度の運営に惜しみない協力を尽くして下さる大学当局にこの場を借りまして心よりお礼申し上げます。そして申すまでもなく、このウリ稲門会奨学事業の成功は会員皆様の協力の賜物です。基金の基になる浄財を提供して下さった篤志家の諸先輩、諸学兄、また様々な形で協力をして下さった執行部を始め会員の皆様にご改めて感謝申し上げます。

一方で、奨学金事業の趣旨と重要性をご理解いただいた上で、「とは言っても、そもそも同窓会の主役は壮年であって、小僧や小娘ではない!」そうお考えの学兄も少なからずいらっしゃるでしょう。ごもっともです稲門会の主役は参席して下さったそれぞれの学兄です。懐かしい学兄との交流を深めてください。そこに加えて、年端もいかない在校生にご自分の貴重な経験の一部でも熱く語ってやってください。あくまで嫌がられないほどでお願いする次第ですが…。

最後に、今日が素晴らしい一夜になることを祈念して、私の挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

2016年奨学生より

安顕基君 / 商学部1年

はじめまして、今年度ウリ稲門会の奨学生として採用していただきました。早稲田大学商学部の安顕基(アンヒョンギ)と申します。私の両親はともに在日コリアンで、私で、日本に住み始めて4世代目となります。私は小学校、中学校時代を、東京都の墨田区にある東京朝鮮第五初級中学校で過ごしました。そのため、在日コリアンのみなさんには昔からお世話になってきました。高校からは都立高校に通ったものの、今の私人間としての土台となる最も大切な部分は、在日コリアン社会の厳しくて、かつ、暖かい環境のおかげで養われたものだとおもっています。

そして、つづいて高校時代、私は初めて日本の学校に通うことになり、最初は警戒心も強く、日本の学生との価値観の違いに驚かされましたが、しばらくすると、仲のいい友達もたくさんできて、価値観をかなり広げることができました。高校を卒業した後でも会える友人がたくさんいる今、日本学校に進学するという自分

の決断は正しかったと自信を持って言えます。私は高校時代、主に部活動と勉学に精力的に取り組みました。部活動は、小学校一年生の時から続けてきたサッカーを継続しました。私は、小学校の時はクラブチーム、中学校の時は部活動に所属し、ほぼサッカーだけに明け暮れる生活をおくっていました。しかし、私が進学することを決めた高校はさほどスポーツが盛んな学校でもなく、サッカー部は正直弱小チームでした。そのため、高校ではサッカーは遊び程度にして勉強を頑張ろうと入学前は思っていました。が、いざ入ってプレーしていると、なんとこのチームで勝てるようになりたいといつものまにか心に火がついていました。

それから私は、他に誰も参加者がいない朝練を、朝の7時から一人で行い、周りを巻き込むよう頑張りました。すると、朝練の参加者は徐々に増えていき、最後の大会では、好成绩とはいえないものの、2勝することができました。また、このような部活動と並行して資格勉強、受験勉強などの学業にも力をいれました。その結果、私の同期のなかで唯一、英検準一級、TOEIC820点を高2の時に取得できました。また、その後の大学受験でも現役で早稲田大学商学部合格することができました。これらの高校時代の経験を経て、前述のとおり、私はやると決めたことは絶対にやり抜く力を持っていると確信し、また、これは少年時代の在日コリアン社会での経験のおかげだとあらためて実感しました。

そして大学に入学してからもう7か月がたった今、私は学部



奨学生の安顕基君(左)と姜ヨセフ君(右)

奨学生諸君 おめでとう!

宝基商事(株)

代表取締役 梁直基

〒143-0023 東京都大田区山王1-36-21
TEL : 03-3775-0010 FAX : 03-3775-9292

Messe 株式会社メッセ

代表取締役社長 金君夫

〒104-0061 東京都中央区銀座3-10-9 共同ビル8F
TEL : 03-6859-5225 (代表) FAX : 03-6859-5220

WASEDA ALUMNI SINCE 1888 早稲田大学 韓国校友会

WASEDA UNIV. KOREA ALUMNI ASSN.

会長 李賢儀

#1710 Union Center 310 Gangnamdaero, Gangnam-gu, Seoul, Korea 06253
TEL 82-2-567-5325 FAX 82-2-567-5320 E-mai wasedakr1947@naver.com

(有)クレ・アート企画

代表取締役 呉世一

〒121-0816 東京都足立区梅島1-15-16
TEL : 03-3840-3581 FAX : 03-3840-9140
携帯 : 090-3217-1350

(株)花永

取締役会長 文一陳

会社 〒143-0023 東京都大田区山王2-1-8
TEL : 03-3775-0101 FAX : 03-3775-0334
自宅 〒143-0023 東京都大田区山王1-16-7
TEL FAX : 03-3775-7734
Eメール moon77@ijcom.zaq.ne.jp

大一電機産業株式会社

代表取締役 金宅圭

〒476-0006 愛知県東海市浅山3-77
TEL. 052-308-5111(代)
FAX. 052-308-5115

メットライフ生命保険会社

保険コンサルタント/ファイナンシャルプランナー

朴魯善

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町1-1-1
METLIFE日本橋本町ビル
TEL 03-5203-5821 携帯 090-8850-8500
AG.paku.noson@metlife.co.jp

で経済、統計、会計などを学びながら、来年の秋からの留学に向けて英語の資格勉強に励んでいます。また先日、長期インターン生として採用していただき、現在はIT・Webマーケティング業界のベンチャー企業で実践的なスキル・ビジネスマナーを磨くべく奮闘しております。そのほかの時間はサッカーサークルで趣味としてサッカーを楽しんでいます。

少々長くなってしまいましたが、最後に、この度私をウリ稲門会の奨学生として採用していただき誠に感謝しております。採用していただいたからには、学業やその他の課外活動に取り組みつつも、在日コリアン社会の活性化に様々な形でこれからも貢献したいと思っております。これからも何卒よろしくお願いいたします。

姜ヨセフ君 / 基幹理工学部1年

私は1997年6月7日に静岡県三島市に生まれました。幼いころから家では韓国語を使い、母親が韓国から取り寄せた教材でハングルの読み書きを学んだため、(発音、イントネーションを除いて)現地の韓国人とほとんど同じレベルで韓国語が使えるようになりました。家では常に韓国語のみを使うように言われ、時には日本語を使ったら罰金を払うなどという制度すらありました。今となっては、そのような教育のおかげで、韓国語を使うにおいては何不自由な話せるようになっていていると思ひ、両親に大きく感謝しています。小学校に上がると、日本での一般的な教育に加え、韓国から取り寄せた教材を通して、韓国の小学生の受ける教育内容も同時に受けました。そのおかげで、日本にいただけではわからなかっただろう、韓国の歴史、文化、政治等も知ることとなり、日韓交流に興味を持つようになりました。

私は、家庭だけでなく時代にも恵まれていたと思います。過去の日本で育った韓国人の事例を見ると、多くの韓国人が社会的に迫害されていたことがわかります。しかし、私は生まれてこの方、韓国人だからと言っていじめられるようなことは一度た

りともありませんでした。それくらい日本が韓国人などの外国人の受け入れに対して積極的になっているのだと思います。そのような時代のために、私は自分が韓国人であることに堂々としていられ、そして誇りを感じながら今までいることができました。

私は今年の夏に「誠信日韓学生通信使」という活動に参加しました。活動の内容としては、早稲田大学と韓国の高麗大学でそれぞれ10人ずつ学生が集まり、日韓関係について考えあう、というもの。主に韓国人の広島、長崎で被爆した韓国人について話し合い、そこから日韓併合、慰安婦問題、戦争や平和などの話題に発展していきました。他の人の日韓関係に対する意見が得られ、とても充実した時間となりました。私は、この活動を通して、たとえ一学生じゃあどうにもならないような問題でも、話し合うことだけでもとても重要な意味を持っていて、このような話し合いの場をより広めていく事が、私たちの将来のためになるのだと思いました。

ウリ稲門会奨学金は、在日韓国人を対象にした奨学金であります。ただ、それだけではなく、日韓関係についても携わっていると聞き、私は大変興味を持ちました。今後ウリ稲門会の活動に積極的に参加し、日韓関係について話し合うことができればなあ、と思います。

数日前に私は韓国のKAIST(Korean Advanced Institute of Science Technology)への留学を申し込み、留学候補生として決定いたしました。今までは毎年夏に1.2週間だけ親戚の家に遊びに行くという形ではしか韓国に行くことができず、毎年あまり満足に韓国の文化に触れることができず、残念に思っていました。しかし、この留学という機会に、韓国の技術や文化をいまままでできなかった分多く触れ、学びたいと思います。その際、ウリ稲門会のご助力をいただければ幸いです。

皆様への多大なる感謝を持ちまして、わたくしの自己紹介とさせていただきます。



頃をすっかり忘れた「かつての若者たち」は、在校生の「爆食い」ぶりに口あんぐり。おなかが満たされて落ち着いてからは、参加者一人ずつがスピーチ。学生たちの現況報告を聴くたびに、「かつての学生たち」は、容易に国境を越えて勉学に励む彼らに隔世の感で「へー」とか「おー」とか。反対に60年代、70年代の在日学生の困難な環境や濃い交友関係、そしてそこから生まれた思考を垣間見た学生たちは「えー」とか「ほー」とか。世代を超えた、共感と高揚感に包まれた熱い冬の夜となりました。

奨学生 徳原万莉さん(政治経済学部1年)から

私はいままで自分の国籍である韓国のことについてあまり学習する機会がなく、韓国のことについて知ることができませんでした。また、韓国に行ったこともありませんでした。自分の国について知らないのは寂しいなと思っていたので、今回ウリ稲門会の一員になることができて、これからたくさん皆さんとイベントに参加できることがとても楽しみです。たくさん自分の国について勉強して、たくさんの在日の友達ができればいいなあと思っています。よろしくお願ひします。



北京留学報告

金主栄(国際教養学部3年 / 2015ウリ稲門会奨学生)

ということ。私はもともと中国の文化が好きで、中国人ともよく合うなと思っていましたが、本当に想像以上のやさしさでありえないほどの適当さが面白く思え、毎日この国と都市に惹かれていきます。もちろん今は新しい文化に触れるハニームーンシーズンにいますので、すべてがよく見えるだけなのかもしれませんし、こういった異文化的要素に疲れるときは、遅かれ早かれいつかはやってくると思います。毎日感じている驚きや感動を大切にしていきたいです!

9月2日、北京空港に到着した時の最初の印象は「空港でかつ!人多っ!」でした。まあ予想内だったのですが、それから2週間、他にも「ありえないなこれ!」と声を発してしまう想定外の場面にたくさん出ました。

中国の文化やカルチャーショックの経験談は、来る前からいろいろ聞いていたが、実際に経験すると予想とはまた違うんだとしみじみ感じました。でも今は、ただ外部の者としてあれこれの違いを批判するのではなく、その背景となる原因・要因までも見聞きすることで、その状況がそうであるしかない理由を理解するようになり、しかもそれらの状況を軽く当たり前のように流せるようにもなりました。道路でクラクションの合唱が始まる時間帯は今でもびくびくし、いつか轢かれるかもしれないという恐怖にかられますが、私も一生懸命自転車のベルをちりんちりん鳴らしながら威風堂々と信号を無視して乗り回すようになりました(中国人の友達に北京の交通ルールを尋ねたら、そんなのないよと言われました)、寮のエレベーターが突然動かなくなったり、シャワーの水が止まったり、週一の割合で停電があっても、なんでもないかのように、ああやっぱ中国は人多いからねと冗談をまじえながら流せるようになりました(笑)。ローマではローマ人のごとく、中国に来た以上、どんどん中国人化していく自分におどろきます。



北京大での授業が始まってちょうど一週間になりました。初めての週はオリエンテーションなどいろいろ提出書類がたくさんあったり、病院へ健康診断に行ったり、ビザの申請をしたりと、あたふたやるべきことリストに追われた生活をしました。しかし、ちゃっかりとそういったスケジュールの合間には、地下鉄に乗り北京大から近い天安門広場や故宮等に行き、観光客としての中国もじっくり味わっています。週末には北

京のコリアタウンといわれる望京や、五道口などで、すでに恋しくなりつつある韓国料理もがっつり食べてきました!北京内だけでも遊ぶ所や見る物があふれていて、これからの冒険に大いに期待しています!

生活面では、食費・交通費もろもろ安い安い!の連続です。バスは平均どの距離でも50円もしませんし、タクシーも基本料金が200円です!(ワオ!)近所の食堂や学食もおなかいっぱい食べても300円ほどしかしません。特に学食が安くて平均200円

今までの印象は、中国はいいことも悪いこともすべてが可能で、人情が熱く本当に人間のおいがる素敵なところだな

新宿明月館で「拡大幹事会および忘年会、加えて奨学生証授与式」

~韓国校友会総会参加報告を兼ねて~

年の瀬を感じ始めた12月10日、当会のホームグラウンド、新宿の明月館で拡大幹事会を執り行いました。年末に行くことから、幹事団と顧問の忘年会も兼ねており、例年たいへんに盛り上がりがあります。今年の場合は、それに加えて9月の奨学生証授与式に体調不良で欠席した奨学生の奨学生証授与式まで設定したのだから、在校生を含んで参加者が25名となり、その盛り上がりは3乗となりました。

拡大幹事会の中で、金君夫会長から12月7日にソウルで開催された早稲田大学韓国校友会総会に、金会長・河相淳副会長・朱茂幹事長・金協一ソウル支部長の4人で参加、納涼会に李賢儀韓国校友会会長に出席いただいた返礼を果たし、事務所への表敬訪問を果たす等、結びつきを強めてきたことも報告されました。

その後、奨学生証授与式を経て、文一陳顧問の乾杯の音頭で忘年会はスタート。「若い者はこんなにも食べるのか」若い



奨学生証を授与される徳原万莉さん

くらいで、オール中華で(あたりまえか)、おいしくて大満足しています。が、脂っこいのでたぶん来年、皆様に会うときは見違えるほど太っているかもしれません。その時は是非ご理解よろしくお願ひします。



勉強面では、早稲田からダブルディグリープログラムで国際関係学院という学部へ交換留学生として来ており、北京大の学生と肩を並べて授業を聴いています。授業中の私をみたら、一見すごく集中しているように見えるかもしれませんが、実は中国語を勉強してきたものの、聞き取りが難しく、先生が話す講義の10パーセントほどしか理解していないのです。特に授業と関係ない雑談をされるものすごく聞き取りづらくなります(3時間の授業は各15分ほどの雑談で始まり雑談で終わります)。授業以外でも言語が通じないってこんなにつらいことなのかと少ししみじみ感じました。ある日、宿題で指定された本を図書館に借りに行ったのですが、デスクに座っている職員に質問をしたもの、何と答えているのか全く分からなくて電子辞書を片手にあたふたしていたら、その方のため息をつきながら、「あなたこれから本当に頑張らなきゃだめよ、行く道が長いわね。」と言われてしまいました(泣)。

今までの先輩も同じような経験をしたということ、聞き取りができるようになるにはおよそ5か月はかかること事前に聞いていたのですが、実際に経験すると、この言語面の壁が思った以上に

ショックが大きく、落胆しました。初めての授業でショックを受けてすぐ、中秋で学校は4日間休みとなりましたが、とてものんきに遊んではいられず、部屋にこもり朝から晩まで机にくっついて勉強して、外に出ないのかと友達が心配するほどでした。でもさすがに3日目には部屋で勉強するのに飽きてしまい、国家図書館という大きくて構造がきれいな北京の国立図書館で勉強してきました(笑)。いまは開き直って周りに座っている中国人のクラスメートや先生にノートや助けを求めつつ毎日明るく奮闘しています。せつちな性格なのでまだ伸びないと毎日あせってはいますが、それでも最近はずいぶんとあれ、これ、ではなくメニューも読んで注文するようになりましたし、道を聞いたら答えを聞き取れるようになりましたし、早稲田の友達と日本語で話しながらも中国の単語が混ざるようにになりましたし、いくらかは日本語の単語より中国語の単語が先に思い浮かぶようになりました(喜)。



これからの目標としては、北京大で中国人の友達をたくさん作ることで、勉強と遊びを両立させながら充実した一年を送ることです。具体的には講義を100パーセント理解し授業中質問もできるようになること、学食のメニューを全部食べてみることに、行く道が長いといわれた図書館のお姉さんと中国語でべらべらおしゃべりができるようになることです。

勉強や今までの常識を覆す文化の相違からくるストレスフルな生活の中で、家族や日本が恋しくなる瞬間はたびたびありますが、与えられた機会に感謝しつつ、最後まで努力を惜しまず最大限この留学から知識と経験を得ることができるよう頑張ります！ 応援をお願いします！

文責 李虎雄学兄

ウリ稲門会関西支部近況

2006年に(故)權世顔支部長と康政植副支部長のもとに関西在住諸学兄が熱い想いで参集し設立したウリ稲門会関西支部も10年が経った現在は、康政植先輩の呼びかけで、年に数回8名程の学兄が集い食事会をしたり、又 大阪早稲田倶楽部のゴルフ大会で毎年のように活躍されている金基弘先輩の音頭取りでゴルフをしたりといった小さな集まりがありますが、「このころのふるさと我等が母校」で結ばれ、親交を深めております。



前列左より裴正彦('63政経)、康政植('62理工)、郭泰弘('67文学)後列左より金恒勝('76文学)康京一('79理工)、金基弘('75商学)、李虎雄('78商学)-----当日、金性勲先輩('74教育)は急用の為残念ながら欠席、7名の食事会となりました。

写真は本年11月7日、大阪上本町の韓国料理店「石亭」で久々の再会、美味しい韓国料理に舌鼓をうち楽しく歓談した時のものです。

裴敬隆君 逝く (金博夫学兄からの寄稿)

ここ何年か学友の訃報が続く憂鬱感があったが、今また、裴敬隆君が急逝した。11月9日、72歳で。8月に伊豆の家に見舞った時は、持ち前の辛いユーモア混じりの舌鋒を久々に開陳してくれ、まずは意気軒昂な彼らに安堵したのだが…。あつという間の感じだった。生老病死が人の定めとはいえ、虚しく、悔しい限りだ。

彼とは1963年4月、共に大学に入学、韓文研の先輩の電報が縁で出会い、以来、交友は50余年、ほぼ絶えることなく続いた。「在日」としての共通の体験、分断した祖国のこと、韓日会話等、その時々様々な問題をめぐって口角泡を飛ばした。マッコリを酌み交わし、先輩たちの貴重な薫陶を受けた。韓国人であることが誇りになり、喜びになるのに大して時間はかからなかった。

三重県立津高校時代は山岳部と「社研」に所属していたとのこと。シャープで論理的、挑戦的な話ぶり、早熟の感があった。リベラルで、ある種の「志」を感じさせた。自らが主役を演じ、演出した演劇を主催したこともある。行動力・実行力は群を抜いていた。彼が大学3年の時だったか、母親の事業を手伝うため名古屋に戻り、飲食店・ビル管理・ホテル経営等、文字とおり学業と事業家の二足のワジの道を歩んだ。ダンボールを作る機械の製造会社も経営し、海外進出も試みた。

その事業に一段落をつけ、母親の事業を早稲田の後輩でもある弟・敬博君に委せ、50歳を過ぎて、新設問もない早稲田大学院アジア太平洋研究課に入学、博士課程を修了した。卒業論文は「韓国とヴェトナム戦争: 虐殺・備兵・謝罪をめぐって」。

大学院在学中の2004年7月、「朝鮮戦争の起源」で著名な米国の歴史学者ブルース・カミングスを早稲田に招聘、ウリ稲門会の後援を得ながら講演会を主催した。裴君を含めた私たちが有志何人かは、親睦と勉強の集まりを永く続けていたのだが、その主催で、2010年4月18日、在日韓国YMCAで「4・19革命50周年事業」の講演会を、金東樞聖公会大学教授ら三氏を講師に招いて催したこともあった。この折も彼が縦横に活躍したのは言うまでもない。



2004年7月18日 中央がブルース・カミングス教授 左端が裴敬隆君 右側のメガネをかけているのが筆者

同月には、在日の若手芸術家を支援する趣旨で作られた「在日コリア文化芸術教育財団」の主催でコンサートが開かれたが、彼はこれにも中心メンバーとして積極的に参画、物心両面の貢献をしたとのことだ。

また、事業の傍、滋賀県立大学非常勤講師を務めた。病状が悪化した後も授業に拘るあまり、教室で倒れたこともあったという。

2013年3月、彼女の誕生日に、彼の永年の願いで夢だった、

最愛の伴侶エステラさんと結婚披露宴が伊豆ホテルで催された。この日のために生きてきたんだと言わんばかりの、満面の喜びに包まれたタキシード姿の晴れがましい彼の姿が今も目に焼きついている。彼女の安堵したオーラの笑顔も…。



車や音楽をこよなく愛し、とことんこだわったという。海外にも数十回行ったと聞く。文字通りダンディーを貫き、何事にも積極的にチャレンジした彼は、72年の人生を、私を含め他の人の何倍も貪欲に、充実して生きたと言えるのではないだろうか。エステラさんへの愛と気配り、献身も立派だった。

一方で、ただ一人の弟・敬博君が早くに病魔に冒されて臥せてしまい、そこに日々老いつつある母親が認知症を患うという不運が重なる。彼は事業の最前線に戻り、全てを背負った。いかに強靱な精神が持ち味の彼でも、かなりのストレスに捕われた筈だ。病状を進めた筈だ。その二人を残して先立つ痛ましさ。彼の心は筆舌に尽くせない。

しかし、心優しい健気な伴侶に巡り逢えたことが彼にとってどんなに幸運だったことか…。それが、せめてもの救いだ。因みに彼女は、学生時代「鉄の女」の異名で知られた英国の首相サッチャー来日の折、通訳を務めたとのことだ。

結婚披露宴では、両人の友人たちによるラテン系音楽の演奏が印象深かったが、その同じ方々が告別式でも演奏した。音楽葬である。彼がそれを望み、彼女が選曲したという。二人で企画した演奏会というわけだ。最後の最後まで自分を貫き通した裴君らしさ、その強さに脱帽する思いだ。

以下は、裴君の訃報を知った方の弔文である。『これから輝かしい人生が待ち受けていたはずなのに、遺されたエステラさんの心の中を思うと言葉もありません。素晴らしい人間性と才能溢れる裴先輩と知り合いになれて、私の人生はどれだけ豊かになったでしょうか。幸せでした。私たち、これからも彼女とともにいます。』(男性)『ほんとうにすてきな人でした。彼に会って、在日であることがうれしくなった…。そんな気持ちにさせてくれる人でもありました。』(女性)

僕たちも裴敬隆君と出会い、友人として、時に同志として、濃密な、楽しい時を過ごせたことは本当にラッキーだった。言いにくいこともズケズケ言ってくれた。数少ない生涯の友人を失った思いだ。

彼が本当にやりたかった事はなんだったのか、何が無念だったのかは、もはや聞けない。

一人の人間の精神的ないちというものは死では終わらないという。彼の在りし日の面影は、未永く私たちの心に残るだろう。時にいたずらっぽい笑みで発したブラック混じりのジョークが聞けなくなった事は、何とも淋しい限りではあるが…。